

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO. 11 高度 3200mの野良犬、野良牛 ～ブータン レポート第2信～



街の至る所、特に寺院では犬が  
くつろいでいる（プナカで）



「ドチュ峠」標高約 3200m

2012年12月中旬、中国・華南の深圳（シェンチェン）市を訪問した。当時、『京都大学・清華大学環境技術共同研究・教育センター』プロジェクトが実施されており、その中間報告セミナーに参加することが目的だったが、それ以上に、激しい反日デモが繰り返されてから3か月後の深圳の模様に興味があった。はたして街は平穏で、研究プロジェクトのメンバーが歓迎してくれたのは予想通りながら、街の店でも日本人であることを気にするそぶりさえない。当時、深圳に滞在していた水野忠雄氏（京大）から、清華大学の学内で清掃などの現場作業に携わっている作業員では、市内で激しい反日デモが起きていることを、全く知らない者も珍しくなかったと聞いた。理由は、徹底的な報道管制が敷かれると、パソコンを持っていない者は情報を入手できる手段が無く、それさえ片端から削除されることである。

その深圳で、プロジェクト・リーダーの田中宏明氏（京大教授）から、最初に注意されたのは、「野良犬に噛まれないように」という事だった。その注意の通り、至る所に野良犬がウロ付いている。市の中心部では余り見かけなかったが、郊外の清華大学周辺では相当数が街中におり、思わず怯むようなかなりの大型犬も珍しくなかった。今や、ドローンが普通に飛んでおり、商店の支払いすら現金が消え去っていると聞く超近代都市・深圳で、野犬たちは変わらず放置されているのだろうか。独裁政権が「トイレ革命」をスローガンにするのは結構だが、同時に、もっと広範な保健衛生対策が必要だろうと言いたい。

深圳の野良犬は街をうろついていたが、ブータンの街では寺院（ラカン／ゴンパ）でくつろいでいた。敬虔なチベット仏教の国だから、殺生を禁忌されており、大切に、かどう

かは分からないが、エサを与えられているのだろう。

牛も同様に、道の真ん中でこれまた、くつろいでいる。犬とは大きさが違うから、数頭の野良牛の群れはなかなか迫力があつた。当然、排泄物もド迫力で、うっかり草むらには入れない。これが乾燥して風に吹かれるのは、観光立国を掲げる国としてはどうか。

首都ティンパーから、北の古都プナカへと通じる国道は、途中、「ドチュ・ラ」を越える。「ラ」とは峠の意味で、日本の印刷物には「ドチュ・ラ峠」と表記されているものがあるが、正しくは「ドチュ峠」だろう。

この峠の標高は約 3200m。峠から 7000m級のヒマラヤ山脈を眺めることが出来る。そして、そこにも何と野犬の群れがおり、峠の下には野良牛がゆったりと歩いていた。観光客の目当ては、当然、ヒマラヤで、「雲がきれた」「今、チョットだけ見えた」とはしゃいでいた時、ノンビリしていた犬が、突然、激しく吠えて1匹の犬を追い回し始めた。つまり、縄張りを犯した犬が出現したわけで、その犬は 1000mか 2000mか分からないが、ふもとの里から上ってきたわけだ。そもそも、先に住んでいる犬もふもとから上ってきたのだろう。

峠にはレストランがあり観光客がいる訳で、恐らく、エサにありつける。つまり、「野犬的経済原則」が 3200mの野良犬集団を生み出した。

世界は民主主義と資本主義の限界・崩壊が喧伝され、その盟主だったはずのアメリカ大統領が、これまでのルールやバランスを、片っ端から壊し始めている。野犬的経済原則よりもはるかに凶暴な経済原則に曝される時、ブータンの社会システムと幸せ度はどうなっていくのだろうか。